

梶原性全の偉業 「頓医抄」と「万安方」に於ける口腔疾患について (その2)^{*1}

鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座, 北里研究所客員研究員 戸出 一郎^{*2}

鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座 三浦 一恵^{*3} 深山 治久^{*3}

要旨: 鎌倉時代を代表する梶原性全は「頓医抄」並びに「万安方」の著者として有名である。今回の目的は、両書から口腔領域に関する部分を抽出して、我が国口腔医学史における両書の位置を推察し、価値を顕彰して今後の研究資料とすることである。

「頓医抄」は正安四年(1302年)から嘉元二年(1304年)に書かれた。中国の先進医術を日本の大衆に広め衆生救済が編纂目的であり、全体をわかりやすい和文で書かれている。参考文献としては、「諸病源候論」「太平聖恵方」をはじめ、中国古医書からとられている。基本的医学観は経絡を軸とし陰陽五行説を背景とした内経医学であり、仏教的慈悲の心も随所に認められる。

「万安方」は正和二年(1313年)頃から書かれ嘉暦二年(1327年)に完成した。参考文献はほとんど「聖済総録」からである。編纂目的は「頓医抄」の場合と異なり、医術を自家の家学として伝え保存するためであり、全体は漢文で書かれ、他見を禁じている。

キーワード: 梶原性全, 頓医抄, 万安方, 口腔領域

Abstract: Seizen Kajiwara, a notable figure in the Kamakura Period, is well known as an author of Ton-ishou and Man-angepou. We described the appreciation of his masterpieces for future research resources and speculate the positions of two books through the history of odontology by extracting what are related to the field.

Ton-ishou, written between 1302 and 1304, was compiled in easy Japanese for the purpose of spreading Chinese advanced medical practices and giving medical relief to the public of Japan. The ancient Chinese medical books, such as Shobyogenkou-ron or Taihei Seikeihou, were the main referential resources used in the book. The book was based on their fundamental medical practices on Daikei medicine focusing on the theory of yin-yang and the five elements, in addition to the mercy of Buddhism.

Man-angepou, written between 1313 and 1327, is mainly referred from Seizaisourouku. Unlike Ton-ishou, the purpose of the book was to preserve their own medicine within their family. It was prescribed in classical Chinese and strictly closed.

Key words: Seizen Kajiwara, Ton-ishou, Man-angepou, Odontology

^{*1} What Seizen Kajiwara contributed using "Ton-isyou" and "Man-angepou"

^{*2} Department of Dental Anesthesiology Tsurumi University School of Dental Medicine, The Kitasato Institute, Ichiro Tode

^{*3} Department of Dental Anesthesiology Tsurumi University School of Dental, Kazue Miura, Haruhisa Fukayama

梶原性全は正安四年より嘉元二年(1302~1304年)の間に「頓医抄」を書き上げた。彼は続いて第2の名著「万安方」の著作に取り掛かったのである。

「覆載万安方巻第一」の巻末には「正和四年九月九日書之子孫励稽古莫失墜此術」とあり、第二巻

末には「正和四年十一月二日巳刻秒之、性全花押五十歳」と記されている。

第五十七巻には奥書に「正和二年抄之了 性全花押」とあることから本書は正和二年（1313年）頃から書き始められたと思われる。現存四十九巻末尾には「嘉暦二年四月二十一日、墨点了凡万安方一部五十巻拾採筒要淖約神術子孫深秘為至宝、性全花押六十二歳」とある。嘉暦二年（1327年）、このとき62歳、性全は晩年14年をかけて「万安方」を完成したのである。

本論ではこの「万安方」から第三十巻、舌・口・咽喉の諸病を抽出して報告するものである。

第三十巻の内容は他科と同じく中国の医書から引用されているが、引用書目は「聖濟総録」が多く、その他は「和剂局方」「三因方」「良驗方」等が見られる。しかし中でも「聖濟総録」からの引用は圧倒的に多い。

病理論は「聖濟総録」に似ているが、更にそれをかみくだいて易しく書かれている。

「聖濟総録」の病理論は「諸病源候論」に習ったものであるが、原書よりも文章が複雑になっている。

性全が「万安方」を編纂した目的は「頓医抄」の場合と異なり、本書の医術を自家の家学として伝え保存しようと考えたからであろう。それゆえ、全体は漢文で書かれ、各巻の末尾には屢々「冬景これを秘し、兄弟親朋といえども容易に閲覧させてはいけない」と他見を拒み秘密がもれないよう注意を促している。

巻第三十の中容について

「万安方」巻第三十の内容は次のように分類されている。

- 一. 舌口歯門付咽喉
治口臭兼齒熱
- 二. 重舌
- 三. 木舌
- 四. 喉痺并喉閉塞
治咽喉閉塞
- 五. 齒牙并齦
腎虛齒風痛
瘡斷
口瘡
灸穴

「万安方」では上記のような分類であるが、「万安方」が最も引用の資料とした「聖濟総録」ではさらに詳細な分類となっている。

「聖濟総録」の第117巻から第121巻までにおける口歯門の分類は次のとおりである。

第117巻

口瘡・口糜・口吻瘡・口舌乾焦

第118巻

口舌生瘡・口臭・唇瘡・唇生核・緊唇

第119巻

重舌・舌腫強・牙齒歷蠹・牙齒疼痛・齒齲

第120巻

蟲蝕牙齒・腎虛齒風痛・齒風腫痛・齒斷腫・風瘡

第121巻

齒間出血・齒斷宣露・齒齲・牙齒動搖・牙齒黃黑・牙齒不正・牙齒挺出・揩齒

「聖濟総録」では分類綱目毎に処方を列記しているが、その方数は第117巻から第121巻まで各巻92, 75, 79, 91, 130方で合計467方の多きに至っている。

これに対して「万安方」では合計88方あり、別に灸療16方が加えられている。

各法の説明、修治、使用法にはふり仮名を付し、句読点、返り点なども付して非常に読みやすくなっている。また我が国では入手し難い薬物はなるべく採用しない傾向を持っているように思われる。

病理論は「諸病源候論」を基本とし、一見して簡潔で分かりやすい。「聖濟総録」もこれと揆を一にしているので更に分明である。「聖濟総録」も「万安方」も古典を正しく踏襲して共に経絡を軸とし、陰陽五行説に基づいた解説は明快である。

「万安方」における口腔疾患各個の記述について

口腔疾患は「万安方」第三十巻にまとめて記載されている。冒頭に一. 舌口歯門付咽喉、という表題があり、次いで病理論が述べられる。その本分は漢文で書かれているが、ここでは和文に訳して紹介する。

一. 舌口歯門付咽喉

「論に曰く、心は舌を主る。脾は口を主る。口舌乾焦は心経が熱を蓄えてこれを脾に伝え、心脾

の二蔵ともに邪熱を受け、口舌の間は津液が乾いて乾焦するのである。また多く五辛を食し、飲酒度を過し、熱上焦につもり、口舌を滋潤することができない。かくして乾焦を来すのである。治療に当たってはこのことを詳にすべきである」とある。

冒頭の論とは「諸病源候論」のことであり、この論説は「万安方」の卷第三十「舌口齒門付咽喉」の冒頭に載せられた病理論と同等であるが、本論は「聖濟総録」卷一百一七、口舌乾焦の始めに書かれた病理論とも同文である。

本項には口舌乾焦とそれに伴う口腔生瘡に対する方が6例挙げられている。6例目の後に次の病理論が述べられている。

「論に曰く、口舌に瘡を生ずるのは、心脾の蔵に熱を鬱積して生ずるものである。けだし口は脾に属し、舌は心に属す。心は火、脾は土である。心火の積熱は之を脾土に伝え、二蔵ともに熱毒を蓄え、発散することができないで上焦を攻めつくす。それ故、口舌の間に瘡を生じ、腫痛させるのである。」

この「聖濟総録」の病理論はそのまま「万安方」における口舌生瘡の病理論として引用されている。

卷第三十「舌口齒門付咽喉」の項に載る方例をあげれば次のとおりである。

乾棗湯 治乾焦口舌
茯苓湯 治心熱舌乾煩燥
杏人煎 治口熱舌焦乾
麦門冬 治口舌乾燥心熱
篇豆湯 治口舌乾燥心脾腸熱口舌生瘡
玄参丸 治口舌生瘡久不愈

前記の病理論はこの六方例の後に記されている。即ち、口舌の乾燥を示す口腔の炎症は経絡的には心脾の熱によって起こるものとされている。

治口臭兼齒熱

五香丸 治口臭去熱毒

本方は「聖濟総録」の処方と一部が異なっている。「千金方」の五香丸とはかなり違う。

豆蔻散 治口臭

雞舌香丸 治口臭去熱毒

この処方「千金方」の五香丸に酷似する。

含香丸 治口臭穢

この処方は「千金方」にもあるが、処方の末尾に芎一兩が加わる。「聖濟総録」と「万安方」には芎を欠く。

七香丸 治口及身臭

「千金方」五香丸と似たような処方であるが、「千金方」は沈香を欠く。「万安方」は「聖濟総録」とは一致する。沈香一兩がある。

細辛散 治口臭、從齒齦血出不止

「聖濟総録」と処方同一であるが、使用量がやや異なる。

丁香散 治口臭齧齒口熱

芎窮散 治府臟蘊熱上薰発口臭 治口臭臭良驗
方右用香白芷一兩三分

二. 重舌和名小舌 舌上下生小舌也

論に曰く、重舌は心脾の二臓に熱気が溜まり伏し、経絡をめぐって舌本に上衝し、遂に舌下の血脉に至って脹起し、小舌の状の如くなる。故にこれを重舌という。そもそも、舌は心の華である。心は火に属す。故に舌の形は火炎の状の如くである。舌に上下ありといえども治方は同じである。

如聖勝金鋌局方 重舌・木舌・腮頰腫れ痛む。急喉閉。纏喉風・飛颺・単蛾・雙蛾・結喉。しばしば用薬を経て水粥を呑む能わざる者も之を治するには皆効あり。

本方は「和剂局方」が宝慶新增方を引用して記載した処方の方名である。

三. 木舌

木舌の病名は「諸病源候論」にはなく、992年刊といわれる「太平聖恵方」に治木舌諸方という方名があるのみである。

此胡散 舌本強り、両辺痛むを治す。

玄参散 心脾の壅熱、木舌を生じ、腫脹する。本方は宋・許叔微の「普濟本事方¹⁾」からの引用である。

蒲黄「聖濟総録」にない医説で、民間の婦人が舌腫に用いたという。この医説は宋・桃谿劉著「活人事證方後集²⁾」にあるものを引用したと思われる。

二霜散・礬石散・麝香散・半夏酒・甘草湯はいずれも「聖濟総録」の引用である。

四. 喉痺并喉閉塞

論に曰く、喉痺は喉裏腫れ塞がり、痺痛し、水漿入るを得ざるを言うなり。治やや緩きときは人を殺す。けだし、脾肺熱毒を蘊積し、利せざるによる。外、寒邪を犯し、二經壅熱し、喉間に結し、痺して通ぜず。その候身熱し惡寒す。治方は先ず鍼して後藥する者もあり。急先の利を知るといふべし。

吹喉散_{局方} 三焦の大熱、口舌瘡を生じ、咽喉腫れ塞がり、神思昏悶するを治す。喉痺並びてよく之を治す。

蒲黃・芒消・青黛

「聖濟總錄」にこの処方はない。「和劑局方」卷之七に「吹喉散」の名で同方がある。

悵帶飲は事證方の引用である。

五香散_{局方} 咽喉腫痛し、諸惡氣結塞して通ぜざるとき急に之を服するに宣し。

如聖湯_{局方} 「聖濟總錄」に散毒湯の名で存在する。一名桔梗湯。「和劑局方」の如聖湯の引用である。

如聖湯 雞峯方では国老湯と名づけられる。寒邪による肺經の外感を治す。

茯苓湯 喉咽の閉塞し利せざるを治す。

治咽喉閉塞

紅藍花 牛蒡根茎葉を絞り塗る。研いだ生の糯米を服用。炒り焦した糯米を膏として喉上へ塗る。

三解湯 脾肺の壅熱により咽や膈が腫れ疼み利せざるを治す。

荊芥湯_{局方} 風熱により肺壅・咽喉腫痛、語声出ず。或は硬い物があるような患を治す。

千両金圓_{良驗方} 纏喉風を治す。千両金は淫羊藿の別名である。

立応円 「是齊百一方」に同方がある。

白礬 「聖濟總錄」の引用である。

五. 齒牙并齦

牙齒疼痛に二種類ある。そのひとつは手の陽明脉虚し、風冷がこれに乗じて痛む場合、之を風痛という。その二は蟲が齒根にあり、侵蝕してやまず、余齒に伝えうけて痛む、之を蟲痛という。この二種の病状は同じではない。古方に塗布（ぬりつける）・漱濯（うがひする）と藥の使用法に二通

りの方法がある。それは風を治し、蟲を去るの二方法の対策によって分かれるのである。

膏本湯 治牙齒疼痛（うがい）

桃白皮湯 治牙齒疼痛（うがい）

呉茱萸散 治牙齒疼（うがい）

乳香散 治牙齒痛不可忍（すり塗る。後うがい）

薑揆丸 治牙齒疼痛（丸とし痛むところへ咬みはさむ）（南人はその辛香を愛す）

細辛湯 牙齒痛久しく癒えざるを治す（うがい）

乾地黄湯 牙齒痛を治す（うがい）

蒼耳湯 牙齒痛を治す（うがい）

李木皮湯 牙齒痛を治す（痛むところをかむ）

松節湯 牙齒痛を治す（うがい）

瓜帶散 牙齒痛を治す（痛むところへ咬みはさむ）

槐皮散 牙齒疼痛を治す（温めて含む）

又方。猪牙皂莢・山椒（痛むところに咬む）

苦參湯 齒疳及び口瘡を生じ、眼赤体して重く、蟲臟府を蝕す。（熱して含み冷えて吐く）

玉池散 蟲牙齒を蝕し、蛀虫、風痒、揺動疼痛し、又牙齒宣露して出血する。口氣臭く、齒斷腫れ、膿爛等を病むを治す（牙齒と齦を揩り、温湯でうがいする。次にこの処方を温湯でうがいし、水と生薑、黑豆を煎じ熱くなったら含み、冷えれば吐く）。本方は「聖濟總錄」「和劑局方」「三因方」にも記されている。

乳香散 牙疼、蛀虫、風虚が攻め上って脳まで痛むのを治す。乳香・補骨脂を抹とし、痛むところへすり込む。蛀孔眼があるときは飯粒で和して挺子を以て蛀孔中を塞げば痛は忽ち止む。

比金散 牙疼が止まぬとき風虫が去り神効がある。雄黄を細く研いで、左右痛む方の耳中にいれると疼みは止る。

腎虚による齒痛

論に曰く、腎は骨髓を生ず。齒は骨の余にして腎にしたがって養われるものである。腎經虚弱なれば氣血骨髓を榮養するあたわず、故に呼吸風冷により、或いは寒水でうがいするときは齒を痛ましめてやまないものである。

柴胡湯 腎虚し、牙齒斷腫れ、膈上熱するを治す。（内服）

骨碎補散 腎虚し、氣が不安定となり、牙齒から出血し、牙斷痒痛するを治す。骨

碎補を細末とし、うがいし、朝早く
歯根をこすり、これを吐け、眠ると
き再び実行せよ。唾をのみ込んでも
よい。(揩齒)

芎藭湯 風邪による歯痛、腫れ及び口臭を治す。
(温めて含み、冷めて吐く)

沈香散 風疳にて歯齦が腫れ、歯肉が浮かび動
くを治す。

論に曰く、風疳の病、その症状は槽齦が虚腫し、
歯肉が動揺して歯根を侵食し、腐臭を発して脱落
し、下って齦や頬を攻め、損爛し、膿血共に出る
ものがこれである。思うに腎経の気が虚し、風邪
熱毒が胃にあり、邪気の鬱積することが長くなれ
ば、胸間を上って口歯にまで攻め上ぼって病を発
し、この疾を生じるのである。

処方：沈香・麝香・地骨苧・当帰・升麻・防風・
川芎・桂心・甘草・黄蘗・凝水石

これを細末とし、歯根につける。唾はのめ。(風
疳は日本では近來小児が多く患う。之をよく知っ
ていなければならない。)

独活湯 風疳を治す。

独活・当帰・杏仁・藁本・生乾地黄・甘草・細
辛(うがい)

防風散 風疳による宣露、膿汁、臭気を治す。
(うがい)

細辛散 風疳により痒み、痛み、歯齦が侵蝕さ
れる。(細末を貼付する)

薔薇根散 口瘡があり年を経て発し、飲食困難
となった者を治す。(含み吐く)

口瘡は一名口糜ともいう。

口瘡には又方として12方あげられている。
各々単味である。この12方の生薬名を挙げれば
次のとおりである。薔薇根・裏荷根・升麻・檳榔
子・桑枝汁・蒲黄・百草霜・呉茱萸末・生地黄汁・
黄蘗末・大黃末・馬齒莧汁并灰(これらは皆口舌爛
瘡につける)

玄参丸 口舌に瘡を生じ久しく治らないものを
治す。(口中に含む)

灸方

灸穴(灸をすえるツボ)

胆俞 咽痛み食下らざるを治す。

湧泉 咽の中が痛んで食が通らない。

璇璣 喉痺で咽が腫れたもの。

尺沢 咽の内が腫れ、痛み、ものが言えない。
胸脇支満がある。

人迎 咽喉癰腫。

缺盆 喉痺。

掖門 咽の外が腫れ、寒厥し、臂痛み動かさせな
い。

天突 喉中声を発し、食下らず、蛙のような声
となる。

亶中 喉痺。

勞宮 小児口瘡・歯齦爛臭。

角孫 歯齦腫、物がかめない。小児疳湿瘡。

耳門 二穴 歯齦痛む。大寒骨髓に至る。故に
頭痛み、歯もまた痛む。

聴会 二穴。

外関 牙の痛み。(資生経)

陽谿 歯痛。(銅人經³⁾)「銅人經」には「…手の
陽明脉の行く所なり。経となす。狂言し、喜笑し
て鬼を見る。熱病・煩心・目風・赤爛し、翳厥あ
り。頭痛・胸満・寒熱・瘧疾・喉痺・耳鳴・歯痛・
驚悸・肘臂不挙・痲疥を治す。鍼入三分。留七呼。
可灸三壯。慎如前法。」と述べられている。

卷第三十 卷末には次のような註文がある。

嘉暦二年二月十七日 未点了

嘉暦一年二月十九日 墨点了 冬景秘之雖為兄
弟親朋不可容易披閱也。(冬景之を秘し、兄弟、親
しい友と雖も容易に閲覽させてはいけない。)

結語

「頓医抄」並びに「万安方」は鎌倉時代、梶原性
全によってあらわされた医学全書である。「頓医
抄」は正安四年(1302年)から嘉元二年(1304年)
の間に書され、「万安方」は正和二年(1313年)か
ら嘉暦二年(1327年)の間に著された。

「万安方」は「聖濟總録」を主たる参考文献とし
て、同書からの引用が圧倒的に多い。その他、「千
金方」「和剂局法」「三因方」「活人事證方」「普濟
本事方」「良驗方」「資生経大成」「銅人腧穴鍼灸
経」等から引用されている。

梶原性全の医術は「諸病源候論」の分類を参照
して分類され、基本的には経絡を軸とし、陰陽五
行説を背景として展開される所謂「内経医学」の
立場に立つものである。

性全は「万安方」で「聖濟總録」その他の医書
を引用書写するにあたり、全文原文のとおり漢文

で書かれているが、それに返り点、送り仮名を付して分かりやすく表現されている。

彼の二大著書「頓医抄」と「万安方」を比較してみれば、「頓医抄」は中国の先進医術を日本の大衆に広め、衆生救済の目的を以て著されたものようである。しかし、「万安方」は、これを梶原家の学統として保存し、永く続くことを願っていたのである。そのため他見を禁じ、特に我が子の冬景が本書を秘本として永く自家に温存することを望んで書かれたもので、各巻の末に書された冬景への思いやりの言葉にその志がはっきり述べられている。

参考文献

主たる文献は本論（その1）の末尾に載せた。ここでは補遺を載せる。

- 1) 宋・許叔微：「普齐本事方」1132年，和刻，百々俊道校訂「普齐本事方」1988年漢籍医書集成第二輯，エンタプライズ，東京
- 2) 宋・桃谿劉：「活人證方後集」，（内閣文庫）
- 3) 宋・王准一：「銅人腧穴鍼灸図経」1027年，経絡治療研究会復刊，1974年，東京

著者への連絡先：戸出一郎

横浜市鶴見区鶴見 2-1-3

鶴見大学歯学部歯科麻酔学講座

TEL 045 (581) 1001